

歴史的景観の保全活動と地域認識：鹿児島市喜入 旧麓地区でのフィールドワーク

著者	太田 秀春
雑誌名	地域総合研究
巻	45
号	2
ページ	65-83
発行年	2018-03-15
URL	http://id.nii.ac.jp/1654/00000940/

歴史的景観の保全活動と地域認識

—鹿児島市喜入旧麓地区でのフィールドワーク—

太田 秀春*

This paper describes efforts by the author and his students to preserve the landscape of the Motofumoto(旧麓) district of the Kiire Township in Kagoshima City. The Motofumoto district, or Tojyo (外城), is where samurai of the Satsuma clan (薩摩藩) settled. This district abounds with remnants of the Edo period such as a gate to a samurai residence. Through fieldwork by the author and his students, the local residents' interest in the area increased, and this also led to greater communication within the community. The students also acquired many skills in the course of their fieldwork.

はじめに

近年、いわゆる「産学官」が連携しての活動が盛んになっている。本学でも平成26年（2014）に鹿児島市と包括連携協定を締結し、商店街の活性化やイベント・ボランティア参画など、多様な分野での活動に取り組んでいる。筆者は平成27年度よりこの連携活動に関わり、鹿児島市建設局都市計画部都市景観課とともに鹿児島市喜入町の旧麓地区の景観形成重点地区に指定に向けた活動に携わっている。本稿で扱うのも、このような活動についてである¹。

本稿で考察する地域は鹿児島県鹿児島市喜入町にある旧麓地区で、ここは近世に薩摩藩の「外城」が置かれた地域である²。島津氏は、中世後期の九州統一戦の過程で、膨大な家臣団を抱えることとなった。この武士たちを領内に収容するために、島津氏は、通常の諸藩のように城下町に武士を集住させることなく、近世に入っても各地に分散居住させた。そして、実際に土地を与えて生計を立てさせる地方知行制をとっていた。この分散居住地域を区画したのが外城である。外城は、中世の山城に隣接して設けられることが多かった領主（地頭）の居館である「御飯屋（地頭飯屋）」を中心に、武士（郷士）の居住地区である「麓」、商人や職人の居住地区である「野町」、軍事訓練もできる武家屋敷の通りである「馬場」なども設けられた。これに、精神的な支柱となる神社や仏閣が置かれることが多かった。喜入旧麓にも、中世の山城である給黎城跡、近世を通してこの地の領主であった肝付家歴代の墓所、領主の居館である飯屋跡、武家屋敷の門、馬場と呼ばれる通り、地域の鎮守である南方神社など、かつての外城の名残が色濃く残っている。

キーワード：地域資源、フィールドワーク、歴史遺産、地域認識

* 本研究所所員・本学国際文化学部教授

- 1 このあたりの事情については、太田秀春（2016）、「鹿児島市喜入旧麓地区における景観保全—鹿児島国際大学と鹿児島市との包括連携にともなう活動—」、『地域総合研究』44巻1号参照。
- 2 鹿児島市喜入町の基本的な事項については、主に以下の資料を参照している。喜入町郷土誌編集委員会編集（2004）、『喜入町郷土誌』増補改訂版、喜入町。喜入村編（1923）、『喜入村郷土史』、喜入村。

薩摩藩内には、このような外城が幕末段階で113ヶ所ほど存在しており、現在においても、知覧（鹿児島県南九州市）、出水（出水市）、入来（薩摩川内市）の外城は近世の景観を良く残しており、武家屋敷や武家門が立ち並ぶ街並みは、国の重要伝統的建造物群保存地区に指定され、地区全体が保護されている。また、これらの地域以外にも、旧薩摩藩領の地域では、かつての外城や武士の居住区である麓の雰囲気が残されている地域が多く、独特の景観を維持している。

このような生活の中で形成されてきた景観は地域の歴史遺産で重要な資源であるとの考えから、国が平成16年（2004）に景観法（法律第110号）を施行し、「美しく風格のある国土の形成、潤いのある豊かな生活環境の創造及び個性的で活力ある地域社会の実現を図り、もって国民生活の向上並びに国民経済及び地域社会の健全な発展に寄与する」ことを目指すとした。これにともない、鹿児島県では平成19年に「鹿児島県景観条例」を制定し、「良好な景観の形成に取り組むことにより、本県の特徴を生かした美しく風格のある景観をつくり、これを将来の世代に引き継いでいく」とした。鹿児島市でも平成20年から「鹿児島市都市景観計画」と「鹿児島市景観条例」を施行し、「地域性豊かな鹿児島らしい風格のある景観の実現を図ることを目的」として、地域性と独自性を活かした景観施策を実施している。具体的な政策の一つとして、鹿児島市では「景観形成重点地区」の制度を設け、平成25年10月に美しい棚田が連なる「八重の棚田地区」を景観形成重点地区に指定したのを皮切りに、平成26年4月には日本の近代化の先駆けとなった薩摩藩の集成館事業関連の遺産が集中する「磯地区」が指定されている。平成29年4月には、西郷隆盛を祭る南州神社に続く通りで城下町の雰囲気を残している「南洲門前通り地区」が指定された。なお、「磯地区」にある旧集成館反射炉跡などの遺産は、平成27年に「明治日本の産業革命遺産」として世界遺産に登録されている。

本稿で扱うのは、鹿児島市がこの景観形成重点地区への指定を目指していた同市喜入町にある旧麓地区である。喜入旧麓地区は歴史的な景観を残している地域であるが、筆者は、その景観形成重点地区指定の前提として、学生とともに住民や行政と協力して地域の魅力を探り、その景観保全について取り組んできた。この事例を基に、大学・住民・行政という三者が協力しつつ、景観を構成する地域の遺産を後世に伝えていく、そこに大学がどのようなかたちでかかわることができるのか、学生にとってどのような意義があるのか、考えていきたい。



喜入旧麓地区の主な地域資源（『喜入旧麓地区景観計画』³に加筆）

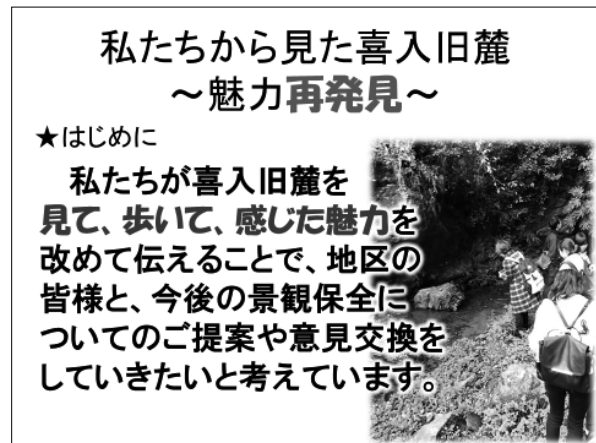
1. 喜入旧麓地区での景観保全活動への取り組み

まず、この活動の経緯などについて簡単に整理しておきたい。平成26年（2014）年8月、鹿児島国際大学と鹿児島市は、それぞれの人的・知的資源や機能等の活用を図りながら幅広い分野で相互に協力し、地域社会の発展に寄与することを目的とするため、包括連携協定を締結した。それにともない、筆者のゼミでは鹿児島市の都市景観課と「喜入旧麓地区の景観保全に関する取り組み」を実施することになった。

まず、平成27年6月に、旧麓地区の住民と地域について一緒に歩きながら概要を案内していただいた。現地の地域資源を実際にめぐりながら、学生の視点で地域の魅力などの「気づき」を記録した⁴。その後、授業の中で話し合いを重ね、漠然とした地域の印象に対して、地域資源を絞り込んで魅力をどのように伝えられるかを考えていった。さらに、喜入旧麓と同じ薩摩藩の外城であり、かつての景観を良く残しており国の「伝統的建造物群保存地区」に指定されて保護されている「知覧麓武家屋敷群」「入来麓武家屋敷群」なども、先行事例としてあわせて視察している。平成28年2月には再度喜入旧麓地区を訪れ、学生たちとともに報告会に向けての最終的な確認をおこなった。この際にも、地域の方々から案内をいただいている。そして、平成28年3月18日に、旧麓研修センターにおいて、鹿児島市都市景観課のお世話をいただき、学生と教員による中間報告をおこなった。

3 鹿児島市建設局都市計画部都市景観課（2018）、『喜入旧麓地区景観計画』

4 この段階での調査結果については、太田秀春（2017）、「喜入旧麓地区の景観保全に関する学生とのフィールドワーク」『地域総合研究』44巻2号参照。



中間報告会における学生の発表資料の一部

その際に、学生から発表したことは、「お金をかけず、どんなに小さいことでも、できることから始める」ということで、関連して、①地域住民の方との清掃活動、②MAPの作成、③イベント等へ参加（例：六月灯）、④喜入旧麓の情報発信（例：SNS・メディア等）などの提案がなされた。また、教員からは、喜入旧麓の多様な魅力・価値の一つとして、薩摩藩の外城・麓の「原風景」を保っているということ、良好に残る「景観」を後世に伝えることの重要性について報告がなされた。報告終了後は、住民と学生との間でディスカッションがおこなわれ、学生の提案に対する意見をはじめ、地域の歴史や文化から日常の話題まで出てきて、非常に活発な意見交換がなされた。この際に学生が作成したディスカッションメモは、後に学生の提案を具体化する上でも大いに参考になっている。その後、11月にも喜入旧麓の地域資源調査をおこない、おおよそ一通りの地域資源を確認することができた。その間に、学生たちは授業の中で、他の地域との比較などを通して、旧麓地区の地域資源に対する理解を深めた。全体での調査以外にも、機会があるごとに学生が個人で現地に入り地域資源を訪れている。

平成29年3月に昨年に引き続き旧麓地区で報告会を実施した。昨年度はいくつかの提案というかたちで発表した⁴が、今回は学生と教員から地域に対して地域資源の魅力の発信についての提案に絞り、具体的には街歩きをおこない、その中で地域の魅力を知ってもらい、というものである。学生たちは、旧麓の魅力として、水がきれい、市内から近いのに自然が豊か、歴史的資料が残っている、という三点をあげ、それらを広く認識してもらうための方法として、まち歩きとしてスタンプラリーをおこなうことを提案した。地域資源をスタンプポイントとして、それらをめぐりながらポイントごとに学生や住民の解説や住民の話を聞き、クイズに答えて、スタンプとクイズの正解シールを集め景品と交換するというものである。また、教員からは、地域にある歴史的資源として、喜入外城の領主（地頭）であった肝付家歴代の墓所を取り上げ、これだけ大規模な墓所が残っているのは旧薩摩藩でも珍しいことや、装飾や彩色の素晴らしさなどについて言及し、貴重な歴史遺産であるとの調査結果を報告した。なお、当日は、地域の名勝地「香梅ヶ^{こべが}淵^{ふち}」の地名伝説である「香梅」について紙芝居を作成し、その継承を続ける活動をおこなっている住民有志の紙芝居も披露された。大学による報告会が、地域の活動や情報を披露したり共有したりする「場」としても機能している様子がうかがえる⁵。

5 このように、学生が地域に入ることによって、住民同士が顔を合わせる機会が増えるという例は、他のまちづくりでも紹介されている。片柳勉・小松陽介編著（2013）、『地域資源とまちづくり—地理学の視点から—』、古今書院。



学生の地域資源魅力発信に関する提案の様子とパワーポイント画面の一部



教員の地域資源の価値についての報告



住民による地域の伝承に関する発表

6月に入ってから、自治会や鹿児島市と話し合いを持ち、学生の提案を実施する方向で動くことになった。具体的には、学生が提案したまち歩きとしてスタンプラリーをおこなうことで住民の賛同が得られ、主催は旧麓自治会、共催が鹿児島国際大学と鹿児島市、実施時期は秋ということで準備を進めることとなった。この打ち合わせは数度にわたり解決すべき問題もいくつか出てきた。特に年度途中で実施が決定したことにより予算がすでに確定している段階なので、費用について調整が必要となったが、関係各所の協力がありこれらの問題も良い方向で解決できた。

2. スタンプラリー「もっと知りたい喜入旧麓」

こうして、喜入旧麓地区のまち歩きとして、スタンプラリーをおこなうことになった⁶。その具体的な実施要項としては、企画名を「もっと知りたい喜入旧麓」とし、日時は平成29年（2017）年11月26日（日）、時間は13時30分受付開始で15時30分終了、参加者については駐車場の制限があることから、自治会への回覧と当該地域の校区である喜入小学校への参加案内をおこなって事前申込制とした。参加定員は、主に親子の参加を想定して20組40名ほどとした。観光地ではなく、一般の住宅地であることから専用の駐車場もないので、一度に大勢の参加者が来た場合、対応できない恐れがあるからである。また、今回の目的は、「喜入旧麓」地区内に住んでいる住民や周辺に住んでいる市民に対して、スタンプラリー（まち歩き）を通して、地域の歴史・魅力・景観について理解を深め、又は再発見してもらうとともに、地元住民に愛着と誇りを持ってもらい、同地区における景観まちづくりの推進を図る」とした。

6 今回のまち歩きの実施に際して、まち歩きの方法や有効性について、次の本を参照している。茶谷幸治著（2012）、「まち歩き」をしかけるーコミュニティ・ツーリズムの手ほどきー、学芸出版社。

このため、小学校に対する案内では、上級学年を中心に親子での参加を呼び掛けた。同様に、まちづくりの担い手となる地域住民についても、回覧板で参加を呼び掛けた。特にこの地域は最寄り駅であるJR指宿枕崎線の喜入駅から1.5~2kmほどの距離にあり、旧来からの旧麓地区の住民が減少し武家屋敷群の通りに空き家が目立ってきているのに対し、隣接して新興住宅が次々と建てられており、新住民が増えているという現状がある。景観として考える場合、地域が一体として保全されることが望ましいことから、鹿児島市の景観形成重点地区の指定範囲に隣接する地域の新しい住民にも参加して欲しいという思いがあった。

形式としては、学生と住民とで選定した地域資源をスタンプポイントとしてそれぞれ学生と住民が立ち、参加者が来た時にスタンプラリーの台紙にスタンプを押すとともにその地域資源に関するクイズを出題し、正解したらシールを台紙に張る、ということとした。すべてのスタンプを集めた参加者には参加賞、さらにクイズに全問正解した参加者には別途景品がもらえるということとした。景品には大学や市役所から提供されたグッズとともに、旧麓住民作成の小物や同地の農産物などが提供された。

当日は、朝から小雨であったが、13時30分の受付開始前から参加者が列をなし、受付を繰り上げて実施した。事前申込制であったが当日参加も多数見られ、最終的に50名を超える参加者を得ることができた。実施中は、傘を差した参加者がスタンプポイントを次々と回り、ポイントごとに学生や住民と触れ合いがみられた。いちおうの順路は設定していたが、参加者は自由にスタンプポイントをめぐり、最終的な集合場所である旧麓研修センターに到着した。旧麓研修センターでは、参加者の集めたスタンプやクイズの正解シールの個数によって、それぞれ参加賞や景品を手にして帰途についた。この際にアンケートへの協力も依頼した。

地域の理解ということについては、住民とともに地域をめぐり聞き取り調査などを通して学生たちが選定した地域資源を、住民たちの意見と突き合わせながらスタンプポイントを絞って設定していった。そして、それらをスタンプ台紙『もっと知りたい喜入旧麓』に反映させるとともに、台紙とは別に旧麓を知るためのパンフレットを作製した。これが、『ぶらり旧麓さんぽ』であり、主なスタンプポイントについて説明を添えている。これらは、スタンプも含めて、すべて学生がデザインして作成したものである。



スタンプラリー台紙『もっと知りたい喜入旧麓』表面（左）と裏面（右）〈学生作成〉



パンフレット『ぶらり旧麓さんぽ』表面（左）と裏面（右）〈学生作成〉



台紙に押した学生デザインのスタンプ（左）とスタンプの一例（右）

スタンプポイントとしては、牧瀬家武家門、給黎城跡、石垣、香梅ヶ淵、肝付家墓所、南方神社の6か所を設定した⁷。それぞれのポイントは石垣以外は『ぶらり旧麓さんぽ』の地域資源として選出した5か所と重なるところが多いので、『ぶらり旧麓さんぽ』での学生の解説が簡にして要を得ているので、それを示しておく。

牧瀬家武家門は、「そこに佇む歴史の語り手 この地域に唯一残った武家門で、その存在感から良好な景観形成に重要なものと認められるとして平成22年（2010）に鹿児島市の「景観重要建造物」に指定されました。歴史的雰囲気を感じさせる石堀や、門の前を流れる湧水の水路を横目に歩くと、清らかな水と共に歩んできた旧麓の歴史を感じることができます」、また給黎城跡は「目には見えない歴史を伝える山城一見するとただの山にしか見えませんが、かつてここに給黎城があり、江戸時代初期までこの地方の政治の中心地でした。武芸の稽古をした馬乗り馬場、激しい戦いの話が伝わる何万ヶ宇都なども残っています。目には見えなくとも歴史を体感し、想像することができるのではないのでしょうか？ 応永20年（1413）島津氏がこの城を手に入れたことを祝って「給黎」を「喜入」と改めました。現在の喜入という地名が誕生した場所です」と解説している。なお、牧瀬家武家門の前を流れる水路は藩政時代からの名残であり、かつての武家居住区である麓の景観を良く残しているということから、「旧麓水路の清流」として鹿児島市の「かごしま自然百選」に選定されている⁸。

7 これらの地域遺産については、鹿児島市教育委員会（2016）、『鹿児島市史跡めぐりガイドブック』（五訂版）、喜入町郷土誌編集委員会編集（2004）、前掲書、喜入村編（1923）、前掲書などを参照している。

8 鹿児島市環境局環境部環境保全課、（2016）、『かごしま自然百選』参照。



かつての武家屋敷の面影を残す牧瀬家武家門



中世の拠点であった給黎城跡

香梅ヶ淵は、「美しい景観に隠された悲しみの涙 エメラルドグリーン色の水はとても美しく、川底が見えるほど透き通っており、夏には泳ぐこともできます。四季や天気により様々な表情を見せ、神秘的な雰囲気であるでパワースポットのようなようです。ここには昔から伝わっている地名の由来となった香梅の悲話があります。この話を知ることで、さらに美しさを楽しむことが出来ます」と伝説を紹介した。肝付家墓所は、「一家の物語を感じる墓所 肝付家墓所は、江戸時代270年に渡ってこの地喜入を治めた領主達の眠る場所です。五輪塔と呼ばれる墓石や、明治初年の仏教排斥運動である廃仏毀釈を感じる首なし地藏を目にすることができます。島津家の家紋入り墓石から武家社会の婚姻に間近に感じられます。明治維新で活躍した「幻の宰相」小松帯刀を生んだ地、ここを訪れて肝付家一家の歴史物語に思いを巡らせてみてください」とその場所の歴史を説明している。



「香梅伝説」の残る名勝地香梅ヶ淵



喜入領主（地頭）であった肝付家歴代墓所

南方神社については、「自然の神秘を感じながらリラックス 「かごしま自然百景」に選ばれたここ南方神社は文明5年(1473)に蒲生宣清によって建立され、歴代領主や住民から大切に守られてきました。鳥居をくぐると木漏れ日に照らされた社殿が姿を見せます。境内には楠や無患子（実みは「子が患わ無い」という縁起物。数珠の材料）などの大木が立ち並び、その姿には圧倒されます。平成28年公開の映画「ゆずの葉ゆれて」のロケ地にもなりました」と、南方神社の来歴と境内にある無患子について説明している⁹。

9 「ゆずの葉ゆれて」はオール鹿児島ロケをおこなっており、特に喜入では南方神社を始めメインのロケ地として各所で撮影がなされた。近年では、これらのロケ地などの舞台となった場所をめぐる、いわゆる「聖地巡礼」が盛んである。このようなロケ地になることで、地域の新たな魅力や資源が誕生している。このあたりの事情については、岡本健編著（2015）、『コンテンツツー

なお、スタンプラリー当日は、この無患子の実を学生が手にして解説をおこない、参加者の景品としても用意している。南方神社は、「喜入南方神社周辺の森林」として「かごしま自然百選」にも選出されている。

石垣は、近代の石垣の中に近世にさかのぼるとみられるものも残っており、当時の地域の技術がどのようなものであったのかを物語る貴重な遺構であり、この地の景観を形成している重要な要素にもなっていることから、スタンプポイントの一つとした。普段は当たり前存在しているので、それほど意識しないものに対しても、この機会に関心を持ってほしいという意図からである。



喜入旧麓の鎮守である南方神社



当時の技術の高さがうかがえる石垣

それぞれのスタンプポイントには学生とともに住民が立ち、学生が地域資源の解説をおこない、住民からは身近に住んでいるからこそ知っている話などをしていただいた。台紙にスタンプを押すだけではなく、ポイントにある地域資源に関連したクイズを出題し、正解した参加者には台紙にシールを貼った。スタンプやクイズをしながら、学生や住民と参加者がコミュニケーションをとる場面がスタンプポイントごとにみられた。学生は歴史的な景観を演出するためと当時の雰囲気を出すために時代劇風の衣装を着用した。このことは後述するアンケートの結果でも好評を得ている。



スタンプラリーの様子（参加者への学生たちの解説やクイズ）



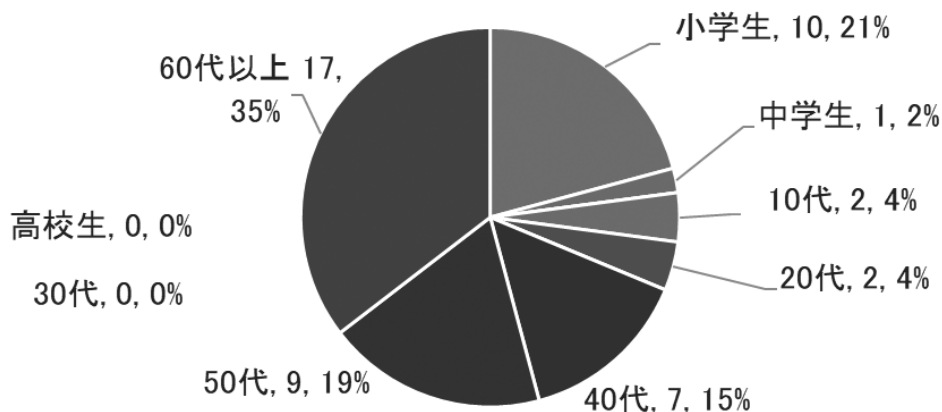
スタンプラリーの様子（台紙にスタンプを押す学生と会場に設置されたのぼり旗）

3. アンケート結果からみてきたもの

当日、参加者と企画の側に参加した旧麓住民にアンケートの協力をお願いした。回答を得たアンケートの集計結果から、項目ごとに分析をおこないたい。

まず、スタンプラリーの参加者のアンケート回答者は49名であった。アンケート未記入の参加者もいたので、実際にスタンプラリーに参加した人数はこれよりも若干増えるものとみられる。参加者の一番多い層は60代以上で3分の1を占めており、50代以上を含めると約半数を超え、40代以上でみると約3分の2になる。このように比較的高齢者が多かったのであるが、小学生が2割を占めている。自治会や校区の小学校に呼び掛けた結果、一定数の小学生が参加を得ることができた。

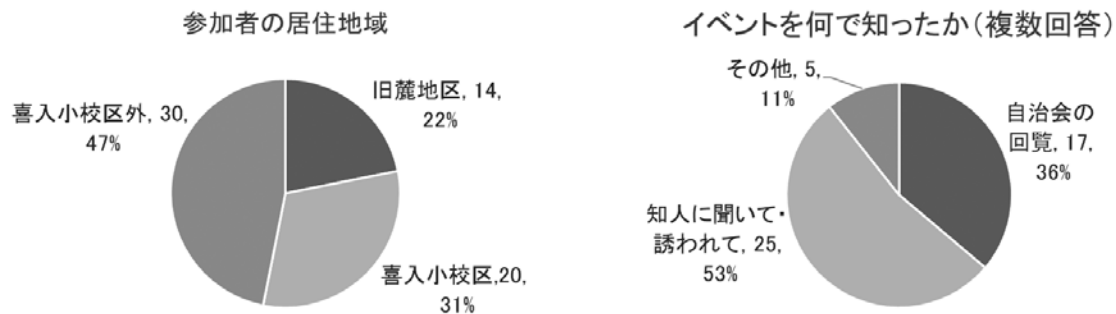
スタンプラリー参加者



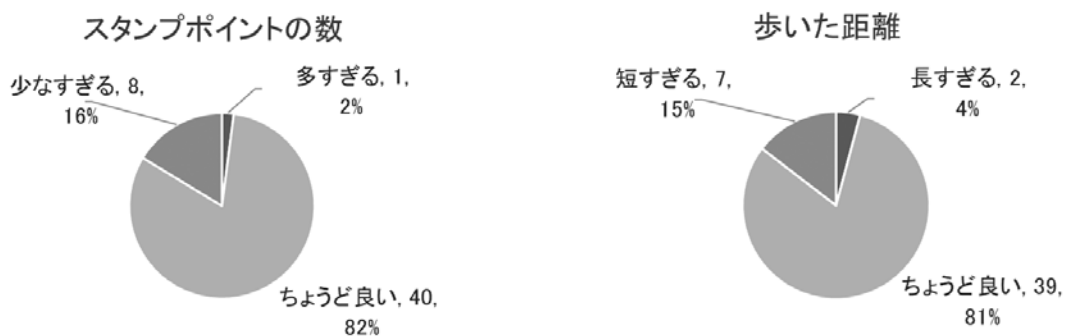
また、居住地域については、校区外からの参加者が半数を占めた。一方で、会場である旧麓地区の参加者が2割、同地区が所属する喜入小学校の校区内からの参加者が3割で合計すると約半数になる。イベントを何で知ったかについては、複数回答であるが自治会の回覧が多かった。それ以上の約半数が知人に聞いたり誘われたりというものであり、いわゆる口コミがかなりの数に上った。その他としては、「学校からの配布プリント」が3、「小学校からの配布プリント」が1、「大学」が1であった。

今回のイベントについては駐車場の確保などの問題があり、当初から大人数の参加者を設定せずに、地域住民を中心とした参加を考えていた。したがって、広報についてはマスコミなどを通して大々的にはお

こなわず、主に自治会の回覧版と小学校を通しての広報をおこなった。そのため、地域住民の参加者がほとんどであろうと予想していたが、地域外からの参加者が約半数近くになったことは想定外であった。そして、その地域外からの参加者の多くは、おそらく旧麓住民から聞いたり誘われたりして参加したであろうことがアンケート結果から読み取れる。



また、スタンプポイントは6ヶ所設置した。詳細は後述するが、いずれも地域資源としてその魅力を伝えたい場所である。スタート地点のふれあい広場からスタンプポイントを経由してゴール地点の旧麓研修センターまで歩くとその距離は約2kmであり、ゆっくり巡っても1時間以内で回れる距離である。これらの設定については、スタンプポイントの数も歩いた距離も「ちょうど良い」が8割を超え、「多すぎる」や「長すぎる」は若干名にとどまった。むしろスタンプポイントも歩いた距離も「少なすぎる」「短すぎる」とする意見が1割を超えており、もう少し規模の大きなスタンプラリーを望む声があった。今後の検討課題ではあるが、今回のスタンプポイントの数や距離設定は、多くの参加者に良い評価を得られたことがわかる。

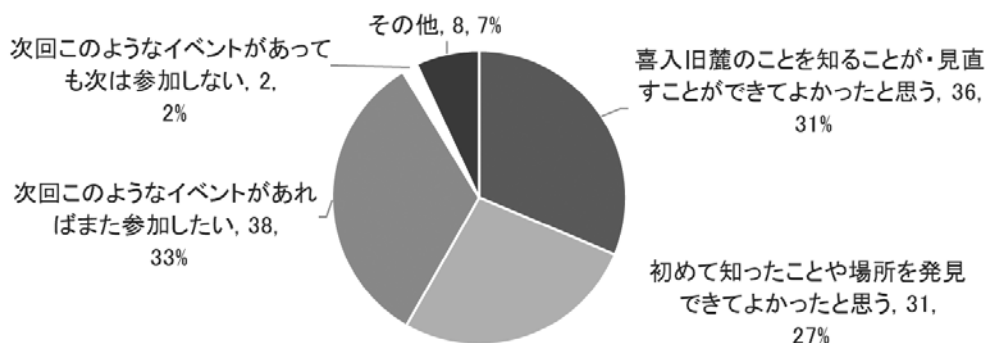


参加者の感想としては、複数回答で115件の回答が得られた。肯定的なものでは、喜入旧麓のことを知りたり見直すことが出来て良かったというものや、初めて知ったことや場所を発見できて良かったという意見が多かった。さらに、次回このようなイベントがあったらまた参加したいという回答もかなりの数に上った。そして、これらの三つの設問は回答者が重複して○を付けている場合が多かった。したがって、今回のイベントを通して喜入旧麓を知ったり見直したりすることができた参加者、あるいは初めて喜入旧麓という場所を訪れたり知った参加者たちの多くが、次回もこのようなイベントがあれば参加したいと感じたことがわかる。

その傍証として、その他は「感じた内容をお書きください」という自由記述であったが、その回答として、「年内晴れた日にもう一度来たい」「春のあたたかいときにまた来てみたいです」「香梅ヶ淵に行けて良かった。また晴れた日に行きたい。喜入駅から歩いて周れるルートを作ってカフェでもあればいいと思います」というように、イベント当日が雨天であったころから、天気の良いときにまた訪れたいという

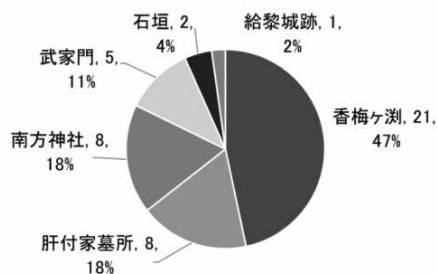
記述が多かった。それ以外は、「雨の中ボランティアを含めスタッフの皆様ご苦労様でした。ありがとうございました」という感謝の言葉があった。このようなイベントに参加する意思がある時点で、もともと興味関心があったということは容易に想像できるが、地域の魅力や地域資源に実際に触れることで、その思いが強まったとみることができる。同時に、そのような関心を持った参加者に対して、一定の満足感を与えるイベントになったことがわかる。

参加してどのように感じたか(複数回答)

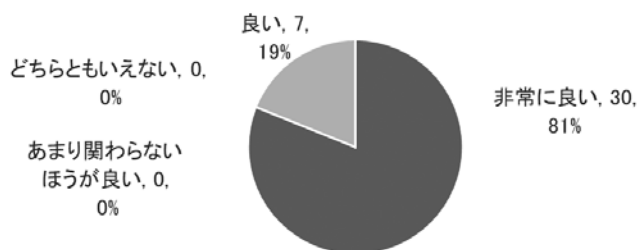


参加者が巡ったスタンプポイントは、それぞれ地域の魅力となる地域資源に設置したが、それらの中で一番良かったものを答えてもらった。その結果、良かったという回答が最も多かった地域資源は、名勝地である「香梅ヶ淵」である。約半数の参加者が一番良かった場所として選んでおり、その支持は2位となった「南方神社」や「肝付家墓所」を引き離して圧倒的な関心を引いたことが分かる。これは、歴史的な伝説を残していることと優れた景勝の地であることによるものであろう。また、「肝付家墓所」は喜入外城の領主（地頭）であった肝付氏歴代の墓地である。五輪塔を中心とした近世初期から近代までの大型の墓石がずらりと並んでおり、壮観を呈している。一般的に墓所というと近づきがたい印象を持つ人も多いが、ここを一番よかったところに挙げた参加者が2割近く存在した。このような事実は、そのような墓所でも、見方や提示の方法を工夫することで地域資源として魅力的な存在になりうることを示している。その反面、「外城」が置かれた地域では、代表的な景観として認識される「武家門」については、喜入旧麓地区でも景観重要建造物に指定されている「牧瀬家武家門」があり、そこをスタンプポイントに設定して解説もおこなったが、それほど支持を得られなかった。

スタンプポイントで一番良かったところ



大学や学生が地域に関わることについて



他に、スタンプラリー自体への自由記述欄に書かれた意見を列挙すると、次のようになる。おおむね肯定的な意見が多く、参考になるものばかりであった。

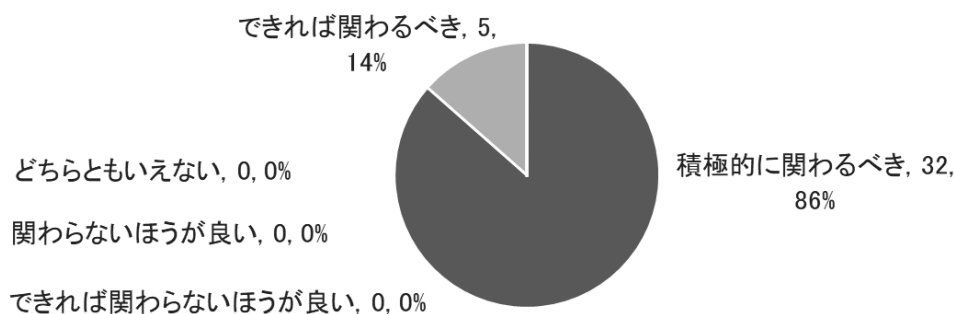
・道あんないがほしい ・喜入駅からの道案内が分かりにくかった ・学生のコスチームがすてきでした ・一つ一つの場所の説明がとてもよかった ・楽しかった ・水路のある町並みも趣きがあっ

てカフェやレストランがあれば人が来ると思います ・今度またゆっくり散策したい ・楽しかった ・スタッフの皆様、お疲れさまでした。あいにくの雨ではありましたが、色々なことを知ることが出来ました。普段は国道を通り過ぎるだけでしたが、今回は少し違う思いで通る事が出来ると思います ・雨の降る日となり少々残念でした。又、天気の良い日にゆっくり歩いてみたいと思いました ・特にありませんが足の不自由な方々はどうか？肝付家のお墓など階段が多いでしたが… ・国道から少し奥に入っただけで、このようなすてきな街なみがあると初めて知ることが出来ました。今回のイベントはとても楽しかったです ・現地での説明をもっと詳しく（特に肝付家墓地）。「香梅ヶ淵」で晴天時の写真が用意されていて良かった ・紅梅娘、武士と要所に人物を配置したのはよかった ・住所と離れていることもありなかなか訪ねる機会のない町だったのでいいチャンスに恵まれました 次回は天気が良いといいですね ・もっと大々的にピーアールしていくべき ・範囲を拡大して喜入地域全体の行事にすればより望ましい ・60代ですがもっと高齢の方々は神社まで大変かな～？ ・たのしかったです！！ ・たのしかったです（すべて原文のまま）

次にこのような地域や行政との活動に大学や大学生が関わることにについてどのように思うか、参加者にたずねてみた。その結果、回答者全員から肯定的な意見を得ることができた。特に「非常に良い」との回答が8割という高い割合を占めたことは、嬉しい結果である。

同様に、今後も大学や大学生が地域に関わっていくことについてどのように思うかという質問に対しても、回答者全員が肯定的な考えを抱いていることがわかった。積極的に関わるべきとの意見が約8割を超えており、今回の関わり方を目の当たりにした参加者から、今後も関わるべきとの意見をいただいたことは、今後の活動を考えるうえでも大変参考になるものである。

今後も大学や学生が地域に関わっていくことをどう思うか



また、大学生の今回の活動に対する感想や意見を自由に記述してもらった設問に対しては、非常に多くの意見があった。以下に、それらを示す。

・わかりやすい説明で非常に良かったです、ありがとうございました ・わかりやすい説明で良かった ・若い人たちがいると華があっていいと思いました。町おこしなどで関わる活動は多いと思いますが、一過性で終わらず、何を残せるか（地域・学生双方に）が大切だと思います。ゼミとしての成果もみてみたいです ・おもしろかった ・説明も分かりやすく楽しかった ・態度が気持ち良かった、準備が遅かった ・地元の方からの協力を得られ、より歴史が身近なものとしてとらえられ良い活動と思われます ・大学生の方が説明して下さり、とても良かったです。特に着物やはかま着用 good です ・とても楽しそうでイキイキとしていて学生自身もこの地がすきなんだなあと感じました ・色々な説明などが分かりやすくよかった ・大学生の皆様がイベントの為に積極的に活動

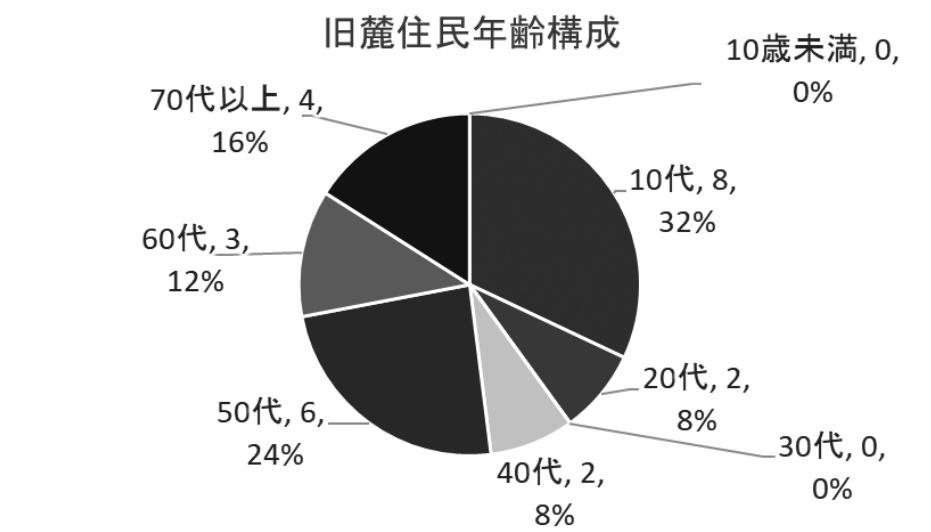
されているのを見て、とてもすごいなと感心しました。これからもこのように地域の方々と交流する機会を続けていって欲しいと思います ・にこにこ楽しそうにされていて和みました。学生が地域の方とそれ以外の方の間にちょうど立って外から参加しやすかったです ・対応が上手だった。色々と質問された時の想定をもう少ししたほうが良いと思う ・大学生が愛想よく対応してくれて好感がもてた ・よく勉強している ・準備、説明など大変だったと思います。ポイント、ポイントで元気が出ました ・積極的に地元と関わって地域の良さを学生の視点から情報発信していくことが重要 ・旧麓以外の史跡を調べ活用して欲しい ・先にしっかり予習してくれて良く判りました ・若い方々が参加されているだけで元気をもらえるので関わり方うんぬんより参加して頂いているだけでも充分良いと思います ・とてもいいきかくで楽しかったです ・親切でした（すべて原文のまま）

これらの自由記述欄の意見は参考になるものが非常に多かった。イベントでの学生の役割や、今後の地域へのかかわり方に関する肯定的な集計結果となったが、これらは自由記述で「一つ一つの場所の説明がとてもよかった」「紅梅娘、武士と要所に人物を配置したのはよかった」「学生のコスチームがすてきでした」「大学生の方が説明して下さり、とてもよかったです。特に着物やはかま着用 good です」「とても楽しそうでイキイキとしていて学生自身もこの地がすきなんだなあと感じました」という意見に、その理由がうかがえる。学生がスタンプポイントで説明をおこなったことで、ただ単に機械的にスタンプを集めて回るという作業にならなかったものとみられる。その学生たちが時代劇風の衣装を着用し、当時の時代をイメージしやすく工夫していた点も、イベントの雰囲気を良くする効果があったとみられる。

また、「学生が地域の方とそれ以外の方の間にちょうど立って外から参加しやすかったです」との意見からは、学生が加わることで、結果的に学生が参加者と住民との間をつなぐ役割を果たしていたことが明らかになった。学生が間に入ってワンクッションおくことで、参加者と住民がスムーズに交流できたという見方ができそうである。

次にスタンプラリーの会場となった喜入旧麓地区の関係者に対してアンケート調査をおこなった。今回のイベントの主催は旧麓自治会、共催が鹿児島国際大学と鹿児島市（都市景観課）であったことから、旧麓自治会から多くの住民が迎える側として参加した。

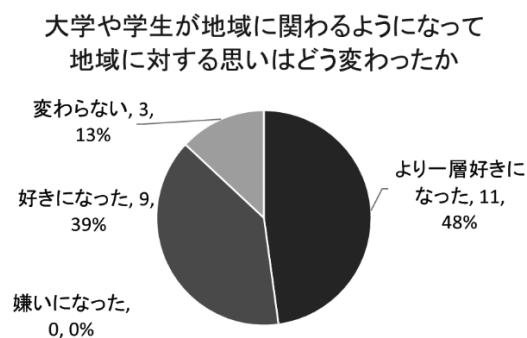
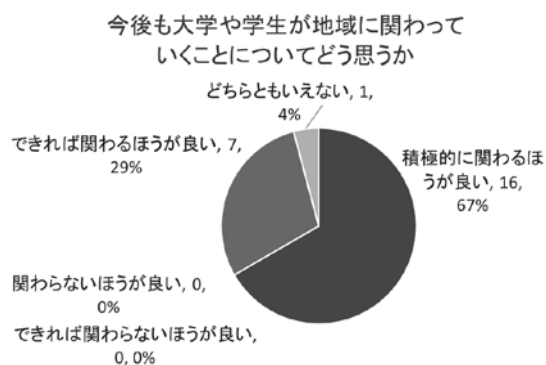
今回のアンケートに回答していただいた旧麓住民の年齢構成は、次のグラフのとおりである。50代以上が半数を占めるが、約3分の1を超える10代の参加が目立っている点は注目される。スタンプラリーの主催となった住民と一緒に親子で準備などに参加した子供が多かったのではないかと推測される。



この住民に対して、今後も大学や大学生が地域に関わっていくことについてたずねたところ、ほぼ全員から肯定的な意見を得ることができた。これはイベント参加者の感想と同様の傾向にある。しかし、詳細にみると、どちらともいえないという意見も存在し、「積極的に関わるほうが良い」という意見は7割弱であり、約3割は「できれば関わるほうが良い」であった。これはイベント参加者のものと比べると、大学や学生が地域に対して積極的に関わることについての、内外の視点の差異とみることもできる。実際に大学が地域に入って活動する場合、いろいろと地域住民との事前の調整が必要であり、さらに住民にとっては、自分たちの生活圏の中に入ってこれるということもある。活動の趣旨や意図を良く説明し、住民と話し合いを重ねるなどの調整や合意形成が重要であると認識させられる。

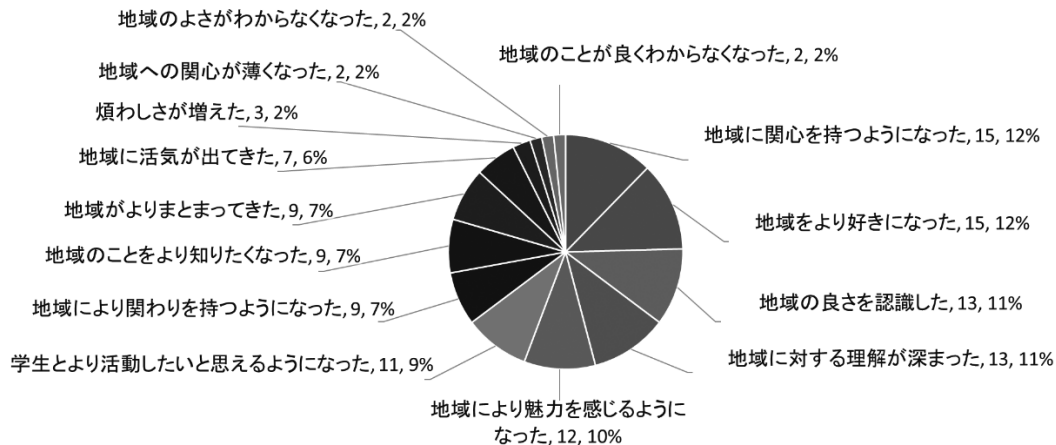
大学や学生が地域に関わるようになって、地域に対する思いがどのように変わったかという設問に対しては、「より一層好きになった」が最も多く約5割、次いで「好きになった」が4割であり、「変わらない」が1割、「嫌いになった」はなかった。

大学がこの地域の活動に取り組むきっかけとなったのは、鹿児島市が目指す「景観形成重点地区」の指定と関連して、住民とともに地域の魅力を探していくということであった。かりに行政が「景観形成重点地区」に指定したとしても、その景観を維持していく主体は地域の住民である。その意味で、住民が地域のことをより一層好きになったということは、非常に好ましい傾向であり、今回の活動が一定の成果を上げたと言ってよいであろう。



また、大学や学生が地域に関わってからどのようなことを感じているか、という設問に対しては、複数回答で興味深い結果が出た（合計は122件）。

大学や学生が地域に関わってからどのようなことを感じているか(複数回答)



一般的にこのような活動の場合、地域の活性化といったものを求める場合が多いが、複数回答であるにもかかわらず住民から「地域に活気が出てきた」という意見はそれほど多く出なかった。それを上回って多かったのが、地域の魅力を理解したり再認識したりしたという意見である。これは、「地域に関心を持つようになった」「地域をより好きになった」「地域の良さを認識した」「地域に対する理解が深まった」「地域により魅力を感じるようになった」という意見であり、それぞれ10件を超える記入があった。これらは、先の設問で大学や大学が関わったことで地域を好きになったという回答が多かったことと合致する。地域に関心を持ち、その理解が深まることで、魅力や良さを認識し、地域を好きになっていくという流れの一端が垣間見られる。

また、これらの意見で興味深かったのは、「学生とより活動したいと思えるようになった」「地域のことを知りたくなった」「地域により関わりを持つようになった」という意見のように、このイベントや準備を通して、地域に何らかのかかわりを持っていくきっかけになっていることがうかがえることである¹⁰。「学生とより活動したいと思えるようになった」という設問に対する丸印が多かったことは、前出の今後の大学の地域へのかかわり方を考えるうえでもありがたい意見である。そして、これらの活動で当初は全く想定しなかったのであるが、「地域がよりまとまってきた」という意見が9件あったことは、非常に示唆的である。もともとこの活動が始まった当初の目的として想定していなかった効果が生まれていたということになる。これについては、前出の参加者へのアンケートの自由記述欄で、大学の地域の関わり方について、「学生が地域の方とそれ以外の方の間にちょうど立って外から参加しやすかったです」という意見があったことは、いみじくも今後の大学が地域と歩むべき方向性の一端を示しているものと考えられる。

おわりに

この喜入旧麓地区での景観保全に関する活動を通して、さまざまな興味深い点が見えてきた。それらを列挙することでまとめにかえたい。

まず、地域資源を保全するということについては、最終的に同地区が平成30年3月1日付で景観形成重点

10 このように、外部の人間が地域に関わって、当事者や当事者とみなされていないような人々を含めた住民と話をしたり聞いたりすることが、いわゆる合意形成に一定の役割を果たすとの指摘がある。今回の活動も、そのような地域の合意形成に何らかの役割を果たしたことが推断される。このような効果については、西村幸夫・野澤康編(2010)、『まちの見方・調べ方—地域づくりのための調査法入門—』、朝倉書店。

地区に指定されることになった。したがって、旧麓地区の景観自体は法的な保護を受けることになり、今後、安定的に景観が維持される可能性が高まった。

「まち歩き」として実施したスタンプラリーについては、地元や行政の協力を得ながら学生が主体的に企画し、提案に地域が賛同し実施の運びとなった。地域の課題を発見して、その解決策を考えていくというフィールドワークの在り方を考えると、最終的に提案を実現させ、一定の目的を達成したということで、学生の「学び」という点でも得るものが大きかった。スタンプラリーも、参加者から好評であり、次にこのような企画があった場合、参加しないという意見はごく少数であり、また参加したいという意見が多かった。イベントに大学生が関わったこと、今後も関わることにしても圧倒的に肯定的な意見が多かったことから、学生のかかわり方が参加者に評価されたと考えられる。

また、旧麓住民の方々のアンケート結果でも、学生が地域に関わることにに対する肯定的な意見が多数を占めた。ただし、今後については、参加者の場合よりも積極的に関わる方が良いという割合が若干減少し、できれば関わる方が良いという意見が増えており、どちらともいえないという意見もあった。実際に自分たちの生活圏に大学や学生が関わりを持つことに対して、当事者になる方々からはさまざまな意見があることがわかる。地域での活動に際しては、これらの意見を尊重しつつおこなうことが重要であろう。

一方、大学や学生が地域に関わったことで、地域のつながりやまとまり的なものが出てきたり、地域がそのような意識を持つきっかけとなったりしたことがアンケートの結果からみえてきた。これは当初想定していなかったものである。旧麓地区住民は地区の年中行事も盛んで、もともと盛んに交流がなされている地域であるが、一方で、新住民も増えてきている。今回は10代や20代など30代未満の若い世代が、参加者、住民側の双方で3分の1ほどの割合を占めた。このイベントがきっかけとなって、既存の住民同士の交流がより深まったり、世代間の交流や新旧住民間の交流が進むことになれば、イベントがもたらした結果として大変喜ばしい。本稿の中で香梅ヶ淵の秘話に関する紙芝居が上演された例を述べたが、大学による報告会が、地域の活動や情報を披露したり共有したりする「場」にもなっている。

大学としては学生の「学び」が気になる場所であった。これについては、イベント終了後の学生たちのレポートの中で、「地域の方々との交流を通して昔の地域の状況などについても知ることができました」「住んでいる町の人たちでも知らないことも多かったようで、私たちの話すことを興味深そうにうなずいて聞いてくださった」「喜入旧麓でスタンプラリーを行い、先輩たちの作った案がこれだけ多くの人とつながり多くの笑顔を生んだことに感動しました」「年配の方から（中略）、地元の知らないことも知れて楽しかった、などと嬉しい言葉を頂いた」など、学生の活動が学生のみならず住民たちの地域理解を深めていることがわかり、それらが「多くの人とつながり多くの笑顔を生んだ」という結果になった。そして、このような活動にやりがいを感じたという感想が多かった。フィールドワークとして考えると、自身の能力について、多くの学生が実施前に比べると実施後に上がったと自己診断をしている¹¹。また、学生たち自身が、地域に関心を持つという段階から、さらに地域の課題を自ら探し出し、その対策を考えたいという方向に意識が動いていることがわかる¹²。したがって、スキルの修得という面からも、また地域で活躍

11 文部科学省が平成25年度から「地（知）の拠点整備事業（大学COC事業）」による取り組みとして実施している、「地域人材育成プログラム」の『フィールドワーク活動記録ノート』の学生記述による。対象学生11名で、考え抜く力（計画の立案、計画の実践）、人と良い関係を作る力（コミュニケーション力、協調性）、自分自身を伸ばす力（感情のコントロール、自主性・積極性）、地域への関心・理解・志向性（地域理解、地域志向）の合計8項目の能力について、5段階評価で自己評価したものである。5段階評価の指標は、5 大いにできる、4 できる、3 どちらともいえない、2 できない、1 全くできない、である。実施前の自己診断レベルは各項目5段階評価で平均2.8であったが、実施後には3.8に上がっている。したがって、多くの学生がこの活動で自身のスキルが向上したと感じていることが確認できる。

12 このような地域志向の科目（本学では基礎演習、演習などのゼミ）の導入によって、それを履修する学生が「地域が好き」という直接的な履修動機から、地域の課題を考えたいという、より深い段階へと意識が変化している事例もある。本学でも、このような傾向がうかがえる。平知宏（2017）、「大阪市立大学における「地域志向系科目」導入に伴う、学生意識の在り方」、『大阪

する人材を育成するという授業の意味からも、この活動に意義があったといえる¹³。

なお、この喜入旧麓のような薩摩藩の「外城」であった地域は幕末に113ヶ所にも上る。外城の場合は、どの外城も基本的な構造は同じであることから、そこに存在する地域資源にも共通するものが多い。今回の喜入旧麓での活動は、他のかつて外城であった地域にも応用できる一つのモデルケースになる可能性がある。今後の地域との連携活動において、その実践を通してその点をさらに検証していきたい。

【謝辞】

本稿の作成に際し、喜入旧麓地区の皆様、鹿児島市都市景観課より多大なご協力を頂きました。記して感謝の意を表します。

なお、本研究は平成29年度鹿児島国際大学附置地域総合研究所共同研究プロジェクトの研究助成を受けて実施したものです。

【参考文献】

1. 喜入村編(1923),『喜入村郷土史』,喜入村
2. 喜入町郷土誌編集委員会編集(2004),『喜入町郷土誌』増補改訂版,喜入町
3. 西村幸夫・野澤康編(2010),『まちの見方・調べ方—地域づくりのための調査法入門—』,朝倉書店
4. 茶谷幸治著(2012),『「まち歩き」をしかける—コミュニティ・ツーリズムの手ほどき—』,学芸出版社
5. 片柳勉・小松陽介編著(2013),『地域資源とまちづくり—地理学の視点から—』,古今書院
6. 岡本健編著(2015),『コンテンツツーリズム研究—情報社会の観光行動と地域振興—』,福村出版
7. 鹿児島市教育委員会(2016),『鹿児島市史跡めぐりガイドブック』(五訂版)
8. 鹿児島市環境局環境部環境保全課,(2016),『かごしま自然百選』。
9. 大西正志ほか(2016),『地域と連携する大学教育の挑戦—愛媛大学文学部総合政策学科地域観光まちづくりコースの軌跡—』,ペリカン社
10. 鹿児島市建設局都市計画部都市景観課(2018),『喜入旧麓地区景観計画』
11. 太田秀春(2016),「鹿児島市喜入旧麓地区における景観保全—鹿児島国際大学と鹿児島市との包括連携にともなう活動—」,『地域総合研究』44巻1号
12. 太田秀春(2017),「喜入旧麓地区の景観保全に関する学生とのフィールドワーク」,『地域総合研究』44巻2号
13. 平知宏(2017),「大阪市立大学における「地域志向系科目」導入に伴う,学生意識の在り方」,『大阪市立大学大学教育』15巻1号

市立大学 大学教育』15巻1号。

13 地域でのフィールドワークが学生のスキル修得に有効な手段となっている事例については、次の文献が示唆的である。大西正志ほか(2016),『地域と連携する大学教育の挑戦—愛媛大学文学部総合政策学科地域観光まちづくりコースの軌跡—』,ペリカン社。

【参考資料】

アンケート① 参加者対象

スタンプラリー「もっと知りたい喜入旧麓」アンケート

■スタンプラリー「もっと知りたい喜入旧麓」を通して、感じることや気づきを入れてください。
又は、当てはまるものに○を付けてください。

1. 参加された方について

①年齢などについて、当てはまるものに○をお願いします。
〔小学生・中学生・高校生・10代・20代・30代・40代・50代・60歳以上〕

②お住まいの地域について、当てはまるものに○をお願いします。
〔旧麓自治体内・喜入小学校区内・喜入小学校の校区外〕

③このイベントを知り得たか
〔自治会の回覧・知人に聞いて（誘われて）・その他（ ）〕

2. スタンプラリー「もっと知りたい喜入旧麓」に参加されて、どのように感じましたか。
（当てはまるものをすべて○を付けてください。）

A 喜入旧麓のことを知ることに、興奮することができて、よかったと思う

I 初めて知ったことや場所を共有できてよかったと思う

U 次回、このようなイベントがあれば、また参加したい

E 次回、このようなイベントがあっても、次は参加しない

O その他（感じたい内容をお書きください。）

3. スタンプのポイントが所ほどでしたか。（当てはまるものをすべて○を付けてください。）
〔多すぎる・ちょうど良い・少なすぎる〕

4. 旧入旧麓はどうでしたか。（当てはまるものをすべて○を付けてください。）
〔長すぎる・ちょうど良い・短すぎる〕

5. 喜入旧麓のスタンプポイントの中で、「一冊役目」と思ったところはどこですか。
（1つだけ○を付けてください。）
〔牧師家茶室・石垣・新築路・番付川・戸付家茶室・南丹神社〕

6. 今回のスタンプラリー「もっと知りたい喜入旧麓」の感想などや、改善した方がよいと思ったことなどがございましたら、ご記入ください。

アンケートは以上です。ありがとうございました。
※ご記入いただいた用紙は、回収BOXへ入れてください。

■このイベントには、鹿児島国際大学の学生が、地域の自治会や鹿児島市との連携活動の一環として
かかわっています。このことについて、アンケートにご協力ください。以下の設問のうち、当ては
まるものに○を付けてください。

7. 大学や学生がこのような地域の活動に関わることに、どのように思いますか。
〔非常に良い・良い・どちらとも言いえない・あまり関わりたくない〕

8. 今後も大学や学生が地域に関わっていくことを、どのように思いますか。
〔積極的に関わるべき・できれば関わるべき・どちらとも言いえない・
できれば関わりたくないほうが良い・関わりたくないほうが良い〕

9. 今回のイベントでの大学生の活動について、感想や意見がございましたら記入願います。

アンケート② 旧麓住民対象

旧麓の方々へ
国際大学のアンケート ご協力をお願いします

お世話になっております。鹿児島国際大学です。
これまで、鹿児島国際大学が旧麓地域に対して、鹿児島市との連携活動の一環として3年にわ
たって関わってきました。これについて、アンケートにご協力ください。以下の設問のうち、当
てはまるものに○を付けてください。
なお、アンケートの結果は、連携活動についての目的のために使用いたします。

●年齢などについて、当てはまるものに○をお願いします。
10歳未満・10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代以上

1. 今後も大学や学生が地域に関わっていくことを、どのように思いますか。
積極的に関わるほうが良い・できれば関わるほうが良い・どちらとも言いえない
できれば関わりたくないほうが良い・関わりたくないほうが良い

2. 大学や大学生が地域に関わって以降、地域に対する思いはどのように変わりましたか。
より一層好きになった・好きになった・変わらない・嫌いになった

3. 大学や学生が地域に関わってから、どのようなことを感じていますか。
※当てはまるものをすべて○をつけてください。

項目	項目
地域に活力が出てきた	地域の良さを認識した
地域に関心を持つようになった	地域により魅力を感じるようになった
地域をより好きになった	地域に対する理解が深まった
地域により関わりを持つようになった	地域のことをより知りたくなった
学生とより活動したいと思うようになった	地域がより使われてきた
関わりが深くなった	地域への関心が強くなった
地域の良さがわからなくなった	地域のことがよくわからなくなった

4. 大学や大学生の地域の関わりについて、ご意見やご感想があれば、ぜひお聞かせください。

ご協力ありがとうございました

-83-